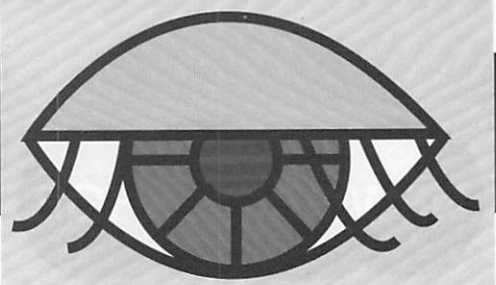


# FAME Report



京都ノリキ見トピックス

取材・文／藤本育子



M's rider:TOSHIYA ARAI

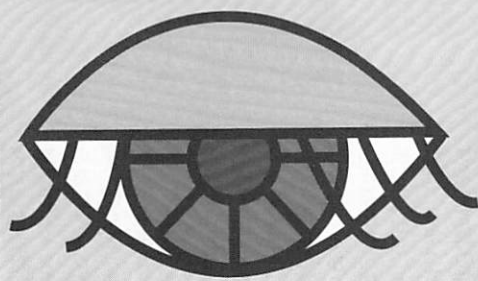
## スノーボードは アルペンの時代だ!!

今からスノーボードをはじめめる諸君、  
アルペンスタイルでグレレンデのヒーローを目指そう。

今や「猫も杓子も」状態といえるほどオーバー・ヒート気味のスノーボード。とはいっても、その人気はフリースタイルに集中しているようだ。そんな中、「これからアルペンの時代」と、知る人ぞ知る京都のポーター先駆者・Msの宮田社長はいう。「確かにフリースタイルはカッコイイ。初心者がハーフパイプ競技のビデオなんか見てしまうと、その迫力に魅かれるのも無理はないと思う。でも実際にフリースタイルを楽しめるのは10代から20代半ばぐらいが限度。実力をキープするのが体力的に難しくなるんです。もし、生涯ボードを楽しみたいと思うなら、迷わずアルペンを始めましょう。アルペンは「ここで終わり」という上限がなく、老若男女、いつまでも楽しめるスタイルなんですから。フリースタイルに比べ、アルペンは迫力不足だという声もあるが……。「それは大きな誤解。迫力満点のスピード感を味わえるのはアルペンの方だし、スピードがあるぶん、高度な技術も必要になる。アルペンは奥が深いんです。スノーボードを極めたいと思うなら、アルペンを始めべきですよ。また3年後の長野オリンピックではスノーボードの参加がほぼ決定していることも

あって、今後日本にもアルペンの魅力が伝わり、注目を浴びることになるでしょう。これからますますエキサイティングなアルペン。ぜひチャレンジして、自身でその魅力を実感してみたいですね。」そんなアルペンがなかなか普及しない理由のひとつに、シヨップ自体の力不足があるという。「新しいボードの開発は、すべてアルペン用のボードで行なわれています。いわば、アルペンボードは職人気質の最高級ボード。それをざっとすすめられないのは、知識がない証拠。現在ポーターとしてスノーボードを楽しんでいる人も、これからは始める人も、責任持ってボードをすすめるシヨップを選ぶ必要がありますね。」某スノーボードメーカーの新製品開発にも携わるほどの実力を持つ宮田社長だけあって、ボードのクオリティを見分ける目には当然、自信を持っているのだ。「アルペンの魅力を知りたければ、ぜひ来店してください。すべてお教えいたしましょう」という宮田社長の心強い言葉を胸に、今シーズンにはアルペンに挑戦してみよう!

# FAME Report



京都ノリ中見トピックス

取材・文/林 薫 写真/中川アキラ

## 埋もれているB面達に愛をこめて… キツチュで妖しげなBサイドの世界。

「B SIDE」を合言葉に、東西の大物曲者DJ達が、メトロで独自の世界を繰り広げた。



左からアモレ・ヒロスク、ゴンザレス鈴木、バラダイス山元、モックン・カズロー、こんな顔あわせはめったにない。



テディ熊谷のフルトガウィーチャーにされたゴンザレス鈴木氏のDJタイム。



70年代、ハッピー・ディスクの音でノリだったDJファミ氏。

レコードのB面とは、普段はA面の陰にひっそりと佇み、ただただ御主人様の気まぐれで裏返してもらおうのを待つだけの存在。あるいは、さして期待も注目も集めないのいい事にとことんやっつけてしまおう、次男坊である。こんな愛すべきB面的名曲達(1?)を日々探求、発掘、そして披露している東西の大物曲者DJ達が結託して出来た今回のイベント。そしてそれは、くしくも本誌に深い関わりを持つメンバー構成となっていたのだ。

まずは「B級歌謡の帝王」モックン・カズローによる血芸でスタート。タイムストッパーズで関西中を布教活動している氏だけに、早くもフロアの信者達は、昔に聞いたであろうアニメ主題歌や「どこぞで見つけてん！」とツツコミたくなるような珍曲に合わせて踊り出す。

続いてはサウンド・インボッシブルのラッキー田中とその友人のDJが登場、フロアを湧かせる。そしてその次に本誌のエッセイでお馴染みのバラダイス山元氏が、白熱のムードを演出。東京ラテンムード・クラブックスを率い、東京のクラブにキャバレー文化を根づかせた山元氏である。

得意のマンボでフロアを見事に「夜の社交場」状態とした。

次に登場したのが「ソウル・ボッサ・トリオ」で人気沸騰中のゴンザレス鈴木氏。元東京パノラマ・マンボ・ボーイズの仲間、山元氏のホットなブレイとは対照的に、こちらはあくまでクール&スタイリッシュ。途中テディ熊谷氏のフルトも加わり、大人のグルーブ(ソウル・ボッサ)を展開したのだ。

そしてトリを務めたのが本誌を始め、人気イラストレーターとしても有名なアモレ安介氏。自身も共演しているテディ熊谷氏もいつの間にかサクセスに持ちかえ、京都の怪人、ムッシュアーデンイもパーカッションで飛び入り参加。いつしかステージ上では熱いジャムセッションが繰り広げられていた。そして、後半にもなると、関西の若手DJも交えての壮絶DJバトルが開始。会場もその異常なまでのテンションにヒートアップしつつ放しであった。

東京の「今」を支えるリーダー達が結集したこのイベント、今最も新しい音がBサイドであることを教えてくれた夜だったのだ。